

泥臭く迎えた数々の転機

西 澤 公 美

2025年4月1日付で保健学科理学療法学専攻基礎理学療法学領域の教授を拝命いたしました，西澤公美（にしざわ ひとみ）と申します。この場をお借りして，これまでの歩みを振り返りつつ，これからの展望についてお話させていただきます。

私は宮城県角田市で生まれました。まったく覚えていないのですが，3歳のときに父親が亡くなったことをきっかけに，母の実家である長野市に引っ越したと聞いています。そこには祖父母や叔母がいたお陰で家の中はとても賑やかで，父親がいないことで困った経験はありませんでした。小学生のとき，私の家族構成の情報がどこからか洩れていたようで，宗教の勧誘をしていた知らない女性から「あなた，お父さんがいなくて寂しいでしょう？」と何度か声をかけられましたが「そうでもありません」と答えたのを覚えています。亡くなった父親には本当に申し訳ないと思っています。

さて幼少期の話から一気に飛んでしまいますが，私が理学療法士として最初に勤務したのは長野市の赤十字病院でした。そこで多くの疾患に携わるなか，とくに脳性麻痺など小児の疾患を担当する機会が多く，のちにこの分野が私の専門領域となっていきました。長野赤十字病院はとても居心地の良い職場でしたが，ここを退職しようと考えた理由は，重度心身障がいのお子さんを安全に預かることができる施設を新たに設けたいと思ったためです。しかし実現への道のりは厳しいものでした。NPO 法人を取得するまではどうにかなったものの資金繰りには特に苦戦し，知識も経験も人脈もお金もない中で熱意だけでは限界があることを痛感しました。結果として開設には届きませんでしたが，このプロセスを通じて出会った方々との交流は今も続いており，足りなかった経験と人脈を広げる大きな転機となりました。半分負け惜しみですが「失敗したけれど前に進めた」という自信も備わりました。

退職後は長野市内の児童デイサービスセンターで勤務しました。施設開設を目指していた期間に学んだ知識はここでの実務に大いに役立ちました。一方で，既存の施設においても「利用者さんファースト」の支援を完全に実現することは難しく，歯がゆさを感じることもありました。そうした状況の中で，ご利用者やご家族が何に困っているのかを見つけ出すスキルが身に

ついたと思います。

その後、縁あって大学に籍を置くこととなり、今まで馴染がなかった教育と研究の世界に入りました。何より、現在の研究の基盤となったデュシェンヌ型筋ジストロフィーのお子さんとの出会いは、それまでの理学療法士歴を振り返ってもかなり異色となりました。初めて経験した疾患であった点はもちろん、研究対象として関わることも新鮮でした。さらに、私に研究をご指導くださった先生方や仲間の存在はとても大きく、いまに至っても人生が変わるほどの影響を受けています。実際の研究はと言うとうまくいかないことだらけで、すぐに結果を出したい私にはストレスフルな時間もありましたが、いつもご指導いただいている先生からは、それでも自分で考えることの大切さと、不器用でも泥臭くやっていくことの強みを教えていただきました。信州大学に来て本当に良かったと思えた出来事のひとつです。

昨年、教授への昇進が決まったときは色々な緊張がほどけてホッとしたのを覚えています。同時に大学での仕事の終わりがカウントダウンされていくような不思議な気持ちにもなりました。個人的にやり遂げたいことは数々ありますが、これまでとは違った立場でやらなければならない新たな仕事に加えて、今まで得てきたことを次世代にどう受け渡していくかも私に課された大きな役割と受け止めています。単なる引継ぎではなく、ここまで築いてきた他分野や地域との繋がりを活かし、社会とつながる実践を行うとともに、次の世代が自分の言葉と行動で活躍できるよう土台を築いていきたいと考えています。

私の挑戦はまだ道半ばではありますが、これまでと変わらず、私らしく泥臭くも正面から向き合っていく所存です。先生方には今後ともご指導ご鞭撻のほど、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

(信州大学医学部保健学科理学療法学専攻

基礎理学療法学領域教授)